

今年もよい年に
「どんど焼き」
行われる

「どんど焼き」とは

昔から正月15日に各戸から集めた門松、しめ飾り、書初めなどを青竹に束ねて立て、燃やし、その火の粉、灰が高く上がり竹がはぜるのは、その年の天気がよいきざしだと考えられてきました。この火にあたり、この火で餅、団子を焼いて食べると災難を免れ、残りの灰を身体に塗れば病を免れるなどといわれ、行われてきました。



▲どんど焼きはじまる



▲紙芝居「別当の古たぬき」の上演



▲恵久美の様子

1月13日(祝)、18日(土)、昌農内分館、恵久美分館で、それぞれ「どんど焼き」が開催されました。
今年で8回目を迎える昌農内では、まず初めに地域の伝承を伝える紙芝居「別当の古たぬき」が上演されました。



▲昌農内の様子

昔の様子をはじめて知った子どもや、昔を思い出して懐かしむ方などみんなが楽しめた作品だったと思います。小学生の手がきによる場面場面の絵には温かみを感じました。恵久美では、今年初めての実施ではありましたが、大勢の参加者でにぎわいました。特に初めて体験する子どもたちにとっては、興味津々といった様子でした。

両分館とも、ぜんざい、お酒などが振るまわれ、大盛況のうちに、無事行事も終わりました。
毎回のことながら準備、実施、後片づけにあたられた役員の方々に頭が下がります。

「六千人の命のビザ」
——杉原千蔵氏に学ぶ——

松前中学校人権・同和教育主任 中島義人

世界各地で発生しているテロ事件、貧困や飢饉に苦しむ難民問題など、戦争や紛争にかかわる問題が毎日のように報道されています。

先日、本校で「六千人の命のビザ」という資料を使った授業を行いました。第二次世界大戦中、ソ連占領下のリトアニアで、日本領事館領事代理を務めた杉原千蔵(すぎはらちうね)氏が、ドイツ軍に追われたユダヤ人へ、海外に脱出するための通過ビザを発給し続けたという話です。再三の退去命令により、リトアニアを去る列車が走り出すまで、窓から身を乗り出してビザを書き続けた杉原氏に対して、

「バンザイ、ニッポン」と大声で叫び声をあげたそうです。
ある生徒は、「杉原さんは、人の命の大切さを本当にわかっていた人だと思えます。リトアニアを去らなければならなくなると、ビザを書けなくなっていた時の杉原さんの悔しさ、辛さが伝わってきました。多く

の障害や身の危険を乗り越え、ユダヤの人々を救いたいという強い気持ちでビザを書き続けた杉原さんの勇氣・生き方に感動しました。いろいろな争いが起きている今の世界で、日本は何ができるのか。私自身は何ができるのか。杉原さんの生き方に学び、考え、行動して行かなければならないと思えました。」と感想を述べました。

杉原氏は、ソ連での収容生活の後、帰国、その後外務省を辞職しています。しかし、1986年、ビザを発給したユダヤ人の一人が来日し、ポロロになったビザを取り出し、杉原氏と感激の再会をし、1985年には、イスラエル政府が感謝の賞を贈り、エルサレムの丘に顕彰碑を建てています。戦争は、人権尊重の精神に最も反するものです。現在でも多くの人たちが犠牲になり、苦しんでいます。杉原氏の行為を感動をもって受けとめ、今、自分に何ができるか真剣に考え、行動しなければならぬと思えます。